

シンポジウム第三部門 書く子ども・書かれる子ども

主体と客体の間：Ⅰ 児童文学研究の立場から

川端有子

1. 緒言：児童文学とは

児童文学とは何かという問いは、長年研究者を悩ませてきた。Carrie Hintz や Perry Nodleman がその定義に膨大な紙幅を費やしているように、本ジャンルは他の文学とは異なり、「読み手（子ども）によって規定される唯一の文学」という特殊性を有する。ここでは仮に「想定する読者が子どもである文学」と定義するが、その境界線は極めて恣意的である。

またおとなと子どもという区分自体がジェンダーのような社会的構築物であり、しかもおとなのほうが圧倒的に優位であるという前提に成り立っているため、児童文学とは、おとなの書き手と子どもの読み手という、非対称的な権力関係の上に成り立つジャンルである。Jacqueline Rose は *The Case of Peter Pan* において、児童文学はおとなと子どもの裂け目に依存し、子どもを部外者として位置づけながら取り込む「不可能性」の文学であると指摘した。Nodelman もこれを引き継ぎ、児童文学はおとなが子どもを植民化するためのツールであり、おとなの権威を確認するためのシステムであると規定する。

しかし、ジェンダーとは異なり、子どもとおとなの境界線は「時間の経過（成長）」によって越境されるという特徴を持つ。本稿では、Rose や Nodelman の権力論を起点としつつ、物語における「書かれる子ども」がいかんして主体性を獲得し、「書く（語る）」行為へと関わっていくのか、そのダイナミズムを、児童文学の黄金期とされるヴィクトリア朝・エドワード朝の古典2作を中心に検証する。

2. 歴史的背景：18-19 世紀英国の子ども観

分析に先立ち、18～19 世紀の英国における 3 つの代表的な子ども観と、託されたベクトルの矛盾を整理しておく。第一に、福音主義による「原罪を背負った子ども」があり、宗教教育や魂の救済のための書物の源流となった。第二に、教育学者らに影響を受けた合理主義モラリストによる「教え導かれる子ども」であり、空想を排した教訓的な「実話」が量産された。第三に、19 世紀初頭のロマン主義台頭に伴う「無垢（イノセンス）な子どもの礼賛」である。これらは相反するよう見えるが、いずれもおとなによって他者化された「書かれる存在」という点では共通する。

この流れを受けて 19 世紀に黄金時代を迎えた児童文学は、子どもを理想の未来（成長への誘導）として見るベクトルと、おとな自身の美化された過去（ノスタルジーによる固定化）として見る、2 つの矛盾するベクトルを常に内包することになる。

3. テキスト分析 (1) : *Alice's Adventures in Wonderland*

Lewis Carroll の *Alice's Adventures in Wonderland* (1865) の主人公 Alice は、決して無垢な天使ではなく、常識や階級意識を備えた知的な子どもとして描かれる。彼女の目的は成熟の象徴である「美しい庭園」への到達（おとなになること）であるが、不思議の国のナンセンスな住人たちは、始まりも終わりもないゲームや不条理な言動で彼女の成長（プロットの前進）を阻止する。身体の大きさをコントロールする経験を経てようやく到達した庭園は、残酷なハートの女王が支配する裁判の場（すなわちおとなの世界への幻滅）であり、Alice は覚醒を余儀なくされる。ここには明らかに、児童文学に内在する二つの矛盾するベクトルが見られる。

しかしよく観察すると、本作の生成過程には、実在の読者（Alice Liddell ら姉妹）の主体性が干渉しており、巻頭詩に描かれる聞き手の姉妹は、傲慢な注文の多い読者として語り手を翻弄する。とはいえ詩に書き込まれている時点で、姉妹たちは語り手（おとな）の追想の中で美化された表象でもある。

また、テキスト内の Alice は「書く主体」への越境を試みている。第 4 章でウサギの家に閉じ込められた際、彼女はあまりに奇妙なその経験が、本の中の出来事の様だと考え、自分でこの経験を本に書こうと考える。ただし「おとなになったら」という条件を自ら付け加えてしまうところが、Alice 自身児童文学を書くのはおとなであることを否定はできない。さらに、Marah Guber が指摘するように、Alice は作中で二度、おとなの男性（トカゲのビル、鏡の国の赤の王様）の手からペン（石筆・鉛筆）を奪い取っている。いずれも彼女の体が巨大化した局面であり、身体的優位性をもっておとなの言説（書く行為）を乗っ取る瞬間として極めて示唆的である。

4. テキスト分析 (2) : *Peter Pan*

J. M. Barrie の *Peter Pan* (1911) の分析に先立ち、正統派ロマン主義的子ども像の極致として Frances Hodgson

Burnett の *Little Lord Fauntleroy* (1886) を対比させる。主人公 Cedric の無垢性は、常に「彼はなんにも知りませんでした」という語句のくりかえしで示されている。これはおとなたちによる徹底的な情報遮断によって構築され、守られている。彼はいわば「自我のない空虚の中心」であった。これに対し、20 世紀初頭のエドワード朝に誕生した Peter Pan は、Adrienne Gavin が言うように、自律性を持ち「おとなにならないこと」を自ら選択する。

ピーターは、その名が自然の神「パン」に由来することからも、自然の児であり、飛翔を可能にする子ども性すなわち「陽気で無邪気で薄情 (gay, innocent, heartless)」を体現する。だが、ロマン主義的な無垢の少年でありつつ、Peter はいわばその無垢の正体を暴露する。この「heartless (薄情さ)」こそ、Peter に見られる子どもの残酷な自己中心性の表れであるからだ。また、Peter の無垢とは、一切の経験の欠如、すなわち忘却という点にある。彼はフック船長もティンカーベルも、ウェンディの名前さえ忘れてしまうのである。

ゆえに、本作において「物語を語り直す役割」として Wendy が必要とされる。そもそも彼女はお母さん役（寝物語の語り手）を担うためにネヴァーランドへ召喚されたのであった。第 6 章 Wendy's Story で彼女が語るハッピーエンドの物語は、家に帰って立派なおとなになる物語であり、おとなへの信頼に基づく冒険譚である。だが Peter はその欺瞞を鋭く見抜く。彼は母に見捨てられたトラウマを抱えており、母親は帰ってくるまで待っていてなどくれないことを知っていたのだ。Peter における「成長の拒絶」の意思とは、おとなへの呪詛であり、まさに「生の否定」へと直結するものなのだ。

結果として、Wendy は当時のジェンダーロールに従う形で「自ら早くおとなになること」を選択し、Peter は永遠に遊ぶ子どもに留まる。ここでも、子どもの主体的選択の背後にあるおとなの言説は否定しがたい。

5. 結言：権力構造の超越と「書く子ども」の可能性

以上、黄金時代の児童文学の古典 2 作を通じ、児童文学に内在する「おとなが書き、子どもが読む」という非対称な構造と、その枠内での子どもの主体性の揺らぎを考察した。

このおとなによる「植民地化」とも言える枠組みは、その後の時代においていかにして超えることができるのか。20 世紀中頃以降発達するヤングアダルト小説は、作者と読者のレベルの差を最小化する試みを続けてきた。また、作品枠内においては、少女が自身の半生を綴る形式が、自立への有効な手法として指摘されている (Trites, 1997) し、子どものコミュニティにおける創作活動についても多くの試みがなされている。

最終的に、真の意味で「子どもが書く」主体となる可能性として、以下の 3 つの位相を提示し、本稿の結びとしたい。

1. Juvenile Writing (若書き) : Bronte 姉妹や Carroll, Virginia Woolf らの幼少期の創作。
2. 雑誌メディアにおける読者投稿 : 双方向性メディアを通じた、読者による言説への介入。
3. 21 世紀のファン・ライティング : Harry Potter Series など人気のシリーズものに見られる、ネット上の二次創作コミュニティにおける、子どもたちの能動的なテキスト生産。

児童文学は、読者の子どもが「書かれる他者」であるものとして出発しながらも、メディアとテクノロジーの変容に伴い、子ども自身が「書く主体」へと逆転するダイナミズムのなかに、今なお位置しているのである。

第一次文献

Barrie, James Mathew. *Peter Pan*. Penguin Classics, 2004.

Burnett, Frances Hodgson. *Little Lord Fauntleroy*. Puffin Classics, 1994.

Carroll, Lewis. *Alice's Adventures in Wonderland/Through the Looking-Glass*. Oxford World Classics, 1998.

主要参考文献

Gavin, Adrienne E. "Unadulterated Childhood: The Child in Edwardian Fiction"

in *The Child in British Literature: Literary Constructions of Childhood, Medieval to Contemporary*. eds. by Adrienne E. Gavin, Palgrave Macmillan, 2012.

Guber, Marah. *Artful Dodgers: Reconceiving the Golden Age of Children's Literature*. Oxford UP, 2010.

Hinz, Carrie. *Children's Literature*. Routledge, 2020.

Rose, Jacqueline. *The Case of Peter Pan, or the Impossibility of Children's Fiction*. University of Pennsylvania Press, 1984, 1992.

Nodelman, Peter. *The Hidden Adult: Defining Children's Literature*. The John's Hopkins UP, 2008.

Trites, Roberta Seelinger. *Waking Sleeping Beauty: Feminist Voices in Children's Novels*. University of Iowa Press, 1997.